楫枕。

千崎たかと

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
楫枕。

【Ｎコード】
Ｎ１８３１Ｍ

【作者名】
千崎たかと

【あらすじ】
遊郭に売り飛ばされ、そこで暮らす事になった真砂と、そこに暮らす遊女達のまったり生活の物語。

ある日の出来事。

お話があります、と真面目な顔で並ぶ両親二人と、全く面識の無い男の正面に鎮座し、真砂（まさご）は一体どんな説教を受けねばならないのかとびくびくしていた。

心当たりは幾つもある。近所の障子戸に穴を開けたり、妹のお菓子をつまみ食いしたり、その他にも他愛ないような悪戯だが山ほどした。

それは決して今のように、わざわざ改まって諭されなくてはいけないような悪戯では無かったが、その事に今の真砂は気付けない。この緊迫感の中、真砂の頭の中は真っ白だったから。

（……と、とりあえず、何か言われたら速攻で謝ろう…）

ごめんなさいの一言が頭の中でちかちか点滅している。

きっとそこの見知らぬ男は自分の悪事に苦情を言いに来たのだろう、という甚だしい被害妄想を抱く真砂は、ちらりと男に目をやって、そしてまた俯く。

心の中で謝る練習をしている真砂の気持ちには気付かない母親が、長い静寂を破りようやく口を開いた。

「……ごめんね、真砂」

「ごめんなさ……え？」

うっかり反射的に謝ったものの、真砂は何故か謝られる立場だった。

ぱっと弾かれたように顔を上げた真砂は、心底不思議そうに首を

傾げた。

「……何が？」

けれど母親は泣き崩れてしまって何も言わない。

やばい、この流れ、俺は母親を泣かす程マズい事を仕出かしてしまったんだろうか。

そんな事を考えながら真砂がだらだらと冷や汗をかいて母親を凝視していると、母親の代わりに父親が申し訳無さそうに呟いた。

「……お前を、売らなければ…ならない」

「そうデスか、俺を……」

どうやら悪い事はしてなかったようで、ふぅ、と安堵の溜め息を洩らした真砂は、けれどその意味に気付いて問い返した。

「う、う、うううう売る！？」

何の悪い冗談かと問い返したけれど、真砂の期待とは裏腹に父親と母親はこくりと頷いた。

どうしよう、本当に見限られる程の事を仕出かしてしまったんだろうか。

未だにそんな考えを引き摺ってどきどきしている真砂に、父親は真剣そのものの表情で静かに言う。

「…今年は不作だった事、分かるだろう、真砂」

どうやらふざけた所は無いらしい。

ようやくその事に気付き、ぎゅっと拳を握って返事をする。

「…勿論」

嫌という程知っている、冬を越せる程の蓄えが今年は無い事。
夜な夜な両親が頭を悩ませている事など、一緒に暮らしている真砂が分からない筈が無い。

「あまり余裕が無い……けれど真結(まゆ)はまだ五歳だ。　そんな真結を売るのは、可哀想過ぎる」

その言葉に、真砂は愛らしい妹の顔を思い出す。
ちょろちょろと真砂に引っ付いて回る真結が、どことも知れない場所に売られる、という事を考えて、真砂はぞっとした。真結は女の子だ、どんなに酷い目に遭うか、まだ十三にしかならない真砂にも分かっているつもりだった。
けれども。

「…俺なら、売ってもいい、って事？」

それ程疎ましいと思われてしまっていたのだろうか、と何だか悲しくなって尋ねた真砂に、それまで泣いていた母親が叫んだ。

「そんなわけないでしょ…！！」

馬鹿、と身を切るような絶叫を響かせた母親が、ぼろぼろと泣きながら怒鳴る。

「そんなわけ、ないわよ…出来る事なら私、あなたを売るなんてしたくない…！　すっごく、すっごく悩んだわ、私、でも！！」

でも。

尻すぼみに言葉を途絶えさせた母親は、再び両手で顔を覆いぼろぼろと泣く。
母親を宥めながら、父親は真砂を見た。
「向こうなら、お前を充分食べさせてくれる。　勉強もさせてくれるし……きっと…お前の為になる…」
「……俺の、ため？」

父親ももう何も言えず、ただこくりと一つ頷いた。
そんな両親の姿に、真砂はぎゅっと心臓が苦しくなる。それ程まで考えて、想って、悩んでくれていた。
二人を見かねた男が、それまで噤んでいた口を開いた。
「…どうでしょう、真砂さん。　といっても、既にお金は渡してありますから、拒否されるわけにはいきませんが」

申し訳無さそうな男に、真砂は諦めと共に頷く。
「……うん…」
「すぐに発ちます。　準備をなさって下さい」

恐らくこの男は人買いなのだろう。
ようやくその事を察せ、真砂は両親を見た。
「真結に行かせるわけにはいかないから、行きます」

恨み言も無くはなかったけれど、真砂の口をついたのは酷く淡泊な言葉だった。
気丈な両親のあまりに痛々しい姿に、到底恨みは言えなかった。
酷く冷静な真砂の言葉に人買いは物珍しそうな表情をしていたけ

れど、泣きそうになるのを堪えてきつく拳を握り締めているのに気付き、声を掛けてくれる。

「真砂さん、荷物を」

こくりと一つ頷いて、真砂は逃げるようにさっと立ち上がった。

遊郭の楼主。

一週間もの長い旅路を歩かされ、既にへとへとになっている真砂(まさご)と人買いらしい男は瓦の載った黒塗りの門の中に入った。
やけに広い道にさほど人通りは無いが、大通り向きに不思議な建物がずらりと並んでいる。ほとんどの建物は二階建てで、一階は籠の網ように中が見える、見たことの無い造り。
決して派手では無いが、目立たない場所に美しい細工が施された建物が多い。
きょろきょろしながら男に付いていくと、その中でも一等大きな建物の隣、一戸建ての家らしい場所に連れて来られた。

「……ここ？」

一体何か、尋ねようとした真砂に気付いた人買いの男は、手招きをしながら教えてくれた。

「公事店(くじだな)っていうんだよ。　おいで」

急かされ、慌てて真砂は草履を脱いで男の後を追った。
先ほど籠のような隙間から垣間見えた建物と比較すれば、中は割と簡素で味気ない。

「公事店って？」

きょろきょろと辺りを眺めて真砂が尋ねると、男は廊下を真っ直ぐ進みながら答える。

「楼主(ろうぬし)の家」
「…ろうぬし？」

から、と襖を引き、男は中に座る男を見た。

「この人の事。　久し振りですね」

そう挨拶して敷居を跨ぎ、男は楼主と呼んだ男の前に座る。
着流しを纏い、僅か崩した体勢で簡素な部屋の中央に鎮座するその男は、おそらくまだ二十代であろう、端正な顔を真砂に向けて怪訝な色を見せた。

「……おい、女衒(ぜげん)。　何で男？」
「ぜ、げん……？」

楼主の口にした聞き慣れない言葉へ小首を傾げる真砂に、人買いは振り返った。

「女の子を遊郭に売る人…つまり俺の事」

そう言いながら手招きをするので、真砂は襖を閉めて人買いの男の後ろに座った。
何やら意味の図れない言葉が沢山出てきて困惑する真砂に、人買いの男は丁寧に教えてくれる。

「遠方から女の子を連れてきてここに売るのが仕事。　…さて旦那、この子を売りに来ました」

後半は楼主に向かって男は言うが、楼主は顔をしかめた。

「何で男？　普通の家は力仕事に必要だから男の子供は売らないだろ」
「妹はまだ五歳にしかならなくて売れないとさ。　でもほら、見た目は上玉」
「……若衆禿（わかしゅうかむろ）ぐらいにならなるか」

楼主の男は一旦筆を置き、真砂へと値踏みするような視線を投げた。そしてさっと立ち上がり、目の前に来て真砂を見下ろす。

「……さて」

じろじろと遠慮無く真砂の全身を眺め回し、楼主は横柄な口調で言う。

「こいつ、年は？」
「十三だそうです」
「もう一、二歳小さくてもいいな……まあいいか、とりあえず」

不躾な男の視線に不愉快を露わにする真砂は、きっと男を睨んでいる。
けれどそんな態度を気にも止めず、男は仁王立ちで平然と言う。

「脱げ」

衝撃の一言に、真砂は襖までざっと後退って胸元を押さえた。

「なんでだよ！」
「何って具合調べ」
「…具合？」

変態、と罵りそびれた代わりに意味が分からず質問したが、楼主の男は真砂を平然と無視して着物を脱がしにかかる。
必死で抵抗する真砂と楼主の男に、女衒は笑った。

「別に男の子だし、具合調べなんて必要ないと思いますよ」
「…あ、そうか。　つい癖で」

癖？こいつは初対面ですぐ着物脱がしにかかるとんでもない変態なのか！？
そう心の中で大いに軽蔑する真砂に、楼主は悪びれた様子は無くあっさり引いた。
そんな楼主の男を睨み付けながら、真砂は女衒に尋ねる。

「何、具合調べって…」
「そのままの意味」
「……？」

それ以上を追求しようとしたが、楼主の男に強く手を引っ張られてそれは叶わない。

「金は後で払う。　ちょっと待っとけ」
「痛っ…！」

きつく掴まれた腕を引かれ文句を言う真砂に、楼主は構う事無くずんずんと部屋を出ながら言う。

「名前は？」
「いたいたいたいたいたい」
「変な名前だな」

「違う！！　痛いんだよ！！」

ばし、と腕を振り払って真砂は楼主の男を睨み付ける。

そんな真砂の怒りも意に介した様子は無く、涼しい顔で男は言う。

「張りは合格」

「…張りって？」

「名前は？」

平然と質問は無視された。いくらなんでもいい加減それは酷い、と内心不服な真砂は、けれど早足な楼主に置いていかれそうで慌てた。

公事店と呼ばれた家を出て、その隣の大きな建物の中へ入る楼主を追い掛けながら、不満気に真砂は答える。

「……真砂」

「そうか」

人の話を聞いているのかいないのか、ちっとも分からない。

真砂が答えたにも関わらず素っ気ない一言だけで、それきり何も言わない男を見上げ、真砂は尋ねる。

「…あんたは？」

「……」

尋ねた途端に突然立ち止まり振り返って、男はずいっと顔を近付けてきた。

吐息がかかる程近い端正な楼主の顔に、圧倒された真砂はじりじりと後退りながら言う。

「な、な、何…」
「…顔もまあまあ。　女衒の言う通り確かに上玉だな、男だが」
「は？」

ふーん、と興味なさげにきびすを返し、どこまでも自分勝手に歩き出す楼主を、真砂は慌てて追い掛ける。てっきり答えてくれるのかと思ったのに、やっぱり楼主は自分の意見ばかりで何も答えてくれやしない。
ずいぶん勝手な人、と小さく呟いて、真砂は階段をのぼる。
階段を上りきった楼主は、鮮やかな色彩の襖を遠慮なく引いて部屋へとずかずか上がっていったから、真砂も慌てて部屋に上がる。

「霞（かすみ）、いるか？」

綺麗な装いを纏う女性がまばらに見えるお座敷の中、楼主が声を掛けると一人の女性が立ち上がった。

「はぁい、なあに、旦那？」

僅かに甘い、けれど媚びを売るようないやらしさの無い、凛とした声音がした。
その方向に目をやった真砂は、見たことの無いような美しい装いで佇む女性に驚く。

「わ…すごーい……」

感嘆を口にした真砂に、霞は艶やかな笑みを向けた。
嫌みの無い着崩し方をした着物と、変わった結び方をされた帯。化粧らしい化粧は紅だけだったが、それで十分に美しかった。

「霞、お前もう一人面倒みれるか？」
楼主の問いに、霞は溜め息をついてみせた。
「新顔？　残念、これ以上は無理です。私だけじゃなくて、みんなもう手いっぱい」
「そうか…」
「面倒みれそうな人なんて……あ、一人いるかも知れませんけど…」
言い淀んだ霞の指す人物に思い当たったらしい、楼主は僅かに顔をしかめた。
「あー…こいつを預けるのにそれは勿体無いだろ…」
「そうですか？」
ひょいと霞がしゃがみ込むと、ふわりと香が薫った。
霞はどぎまぎしている真砂の頬を撫で、まじまじと見詰める。
「将来有望かと…男の子なのが残念ね」
「ふん」
そう素っ気なく真砂を見下す楼主は、不意に真砂の顔を両手で挟んだ。
「…お前、親はどの位の身長だ？」
「そんなに、大きくない……えと、五尺四寸…ぐらい」
「親族は？」
「みんなそんなには大きくない…」

「じゃあそんなむさくるしくなる心配は無さそうだな」

むにゅ、と真砂の頬を潰してから離れ、また真砂の腕を掴み、楼主はずんずんお座敷を出て行く。

「邪魔したな」

また別の場所へと引っ張られる真砂へ、霞はくすくすと笑って手を振る。

「またね、新顔くん」

「えと、うん」

柔らかい笑みと共に優しい口調でそう言われ、手を引かれるままに小走りで歩く真砂もぱたぱた手を振った。

一旦立ち止まり襖を閉め、真砂は楼主から手を掴まれたまま再び尋ねる。

「なあ、なあってば！」

さすがに無視されないだろう程度の声量でそう後ろ姿に叫ぶと、やっと楼主はそっぽを向いたままだけれど返事をしてくれる。

「何だ」

「あんたの名前！」

ようやく楼主は真砂へ振り返って質問に答えた。

「郁成（いくなり）。　様付けて呼べ」

「……何様」

「郁成様」

きっぱりと言い切られ、真砂は愕然とした。さっきからずっとその小綺麗な顔からは予想出来ない偉そうな言葉ばかり平然とのたまう。

有り得ない、と郁成の横顔を睨み付けて再び文句を言おうとすると、それより早く郁成がその切れ長の瞳を真砂へ向けた。

「静かにしろ」

「……うん？」

郁成が立ち止まったのは、一際美しい襖の前。

今度は郁成はその襖へと声を掛けた。

「高良（たから）、入るぞ」

そう言って静かに襖を引くと、ふわりと煙管の煙が流れてきた。

2

真砂がそのお座敷に上がると、広いお座敷の中でたった一人の美女が、静かに煙草の煙を軽くふぅと吐き出した。

「やあ、旦那……あたしに用事かい？」

緩く弧を描く赤い紅を引いた唇から発せられた、砕けたその口調さえも下品な響きは無い。

銀色に輝く細工物の簪や、そこから垂れてしゃらりと揺れる真紅の珠。着崩した着物の裾から覗く白い素足が艶めかしい。

高良と呼ばれたその人は、先程見た女性達よりも一際美しい女だった。

「高良、小間使い養う手空いてないか？」

ふう、とまた僅かに煙を吐き出し、高良はゆったりと目を細めて笑った。

「そんな可愛い子を小間使いにするなんて、旦那は目が狂っちまったのかい？」

「お前もそう言うか」

先ほど霞が言った事と似たような事を口にする高良に、郁成は、はぁ、と溜め息を零し真砂の背を軽く押した。

「なんでもいいから、この口の減らない子供をどうにでもしてくれ」
「だれがだ！！」
なんて失礼な男なんだろう、と初対面からずっと無礼極まりない態度で接し続けられた真砂は腹を立て、背に当てられた郁成の手を怒鳴りながら払いのける。
そんな二人をじっと眺めて、高良は意外そうな顔をした。

「あたしが？」
「他にいない」
「ふぅん」

こん、と煙管の雁首を灰吹きにぶつけ、高良は灰を落とした煙管を置く。
しゃらり、と簪の珠の音を鳴らして立ち上がると、高良は真砂の目の前にやってきて、目線を合わせるようにしゃがみ込んだ。
「禿育てられるような器量、あたしにゃありゃしないけどね」
「太夫のお前が言う言葉か…」

再び意味の分からない言葉が出て来て、真砂は尋ねた。

「太夫って？」
「遊女の最高位。お前預けるには勿体無いにも程があるんだけどな」
「いちいち腹立つ……」

いまいちどれほど凄い人か、というのはいまいち良く分からなかったけれど、小馬鹿にされている事はしっかり分かった。
小出しにねちねち言われなきゃいけないような事は言った覚えがないから、おそらくこれが郁成の性格なのだろうけど、そう思うと

なおさら地味に腹立たしい。こんな男がいるところで働くなんて正直辛い。
早くも帰りたい気持ちになっている真砂の気持ちには気付かず、郁成は高良を見た。

「どうする？　いっつも撥ね付けるけど、今度もか？」
「そうさねぇ……」

気のあるのか無いのか分からないような悠長な態度で真砂を見詰める高良に、真砂はどきどきしながら後ずさる。圧倒される程の美貌に加え、気を張らずとも雰囲気にはどこか知性が漂っている。
見たことの無いような美女に見詰められ、真砂は竦み上がっていた。

「お前さん、名前と歳は？」
「ま、真砂…。　十三、に…なったばっかり…」
「ふんふん」

軽く頷いて立ち上がり、高良は郁成を見て確認する。

「さてねぇ…あたしに預けても大丈夫？」
「なんだ、珍しいな…預かる気になったのか？」
「そう、あたしでいいならね。　だって旦那にずけずけ物言える子なんて珍しいもの」

くすくすと悪戯っぽく笑う高良に、郁成は眉をひそめた。
そんな郁成に益々笑みを深めて高良は尋ねる。

「何を教えたらいい？」
「あー…とりあえず若衆禿にでもしようと思ってる」

その郁成の言葉に、高良と面と向かうのに緊張して郁成の陰にそっと隠れていた真砂が顔を上げる。

「えと……若衆禿？」

さっきも郁成が口にしていた言葉だったが、聞きそびれてしまっていた真砂はようやく尋ねた。

真砂のこそこそした行動に怪訝そうな顔をする郁成は案の定答えてくれず、高良が小さく笑いながら教えてくれた。

「下働き兼遊女見習い…って感じかな。　真砂は男の子だし、多分遊女にはしないけど」

どうなんだい、と尋ねる高良に、郁成は首を傾げて言い淀む。

「まあそのうち考えるさ…それまでは勉強が仕事」

「床技磨きは？」

「いらないだろ」

しゃら、と簪を揺らして首を傾げた高良に、郁成は首を横に振る。

どうする、と郁成が真砂に尋ねたけれど、真砂はまた問い返した。

「床技磨き？」

「……あれ、意味分からない？」

意外そうに真砂を凝視する二人に、真砂はこくりと頷いた。

さっきから二人のやり取りの中で幾つも意味の分からない言葉があったけれど、一々質問するのも段々嫌になってきていた。けれど訊かれたから素直に頷いてみた真砂に、郁成は露骨に顔をしかめた。

「お前、ここが何だか分かってんのか？」

しゃがみ込んで真っ直ぐ顔を見て、郁成が真剣に尋ねてきた。

もしかしてまた自分は何か悪い事をしてしまったんじゃないかと不安に思いながらも、真砂は二、三歩後退り、首を横に振った。

「…ううん。　知らない」

真剣な顔を見ると、両親の顔がだぶる。なんだか怖くなって、真砂はまた一歩後ろに下がった。

誰からも何も聞かされていないし、自分で尋ねようとしても答えてはくれなかった。それにさっきからずっと意味の分からない言葉に気を取られて、聞きそびれてしまっている。

ようやく何か教えてくれるのかという期待半分、真剣な視線に竦む。

真砂の否定に、郁成は独り言のように呟いた。

「あー…親にもなんか聞いてないか」

その質問に、真砂の体が強張る。

恨んでいない、そう思った。思おうとした。

それなのにどうしてだろう、じわじわと黒い気持ちが湧き上がる。自分でもコントロール出来ないような真っ黒な気持ち。

泣いてばかり、悲しんでばかりで、両親はこの後の事なんて何も教えてくれなかった。その事を思い出すと言葉にできなくて、真砂はうつむいて一つ頷く。

それを見て、郁成は溜め息混じりに答えた。

「ここは、妓楼」

がつん、と頭を殴られたような衝撃に襲われる。
さすがにその言葉の意味は分かった。女の人がよく売り飛ばされる、と風の噂程度だが耳にしていた。
俺の為、と言った筈だ。それなのに、こんな場所に売り飛ばしておいて俺の為だなんて、どの口が。
長く歩いて来て疲れきっているせいだろう、ぶつり、と何かが切れるような感覚がして、涙が溢れてくる。
こんな大人に、みっともない姿なんて見られたくない。

（もう、嫌……）

そう思った瞬間、真砂はきびすを返して走り出した。
真砂、と酷く憔悴した声が聞こえた気がしたけれど、そんな事どうでもいい。もう、何だって良かった。
母親の涙すら今は理不尽に怒りが込み上げる。どうして俺があんな八つ当たりのような言葉をぶつけられなくてはならなかったのか。
それを言っていいのは、俺だ。売り飛ばしたあんたじゃない。
ぼたりと零れ落ちた涙をぐしゃぐしゃ拭いながら、真砂は建物を出て、行き先も考えずに走った。

3

「逃げられた」

残された郁成は、そう舌打ちをした。突然泣き出したと思えば走り出す。面倒くさい子供にも程がある。

ぐしゃりと前髪を掻き乱し顔をしかめる郁成に、高良が吐息をついた。

「可哀想に、長旅に疲れてるのに旦那がぶっきらぼうに扱うから」

そう非難され、郁成は高良に食ってかかる。

「俺のせいか」

「この際責任は誰でもいい」

不本意そうな郁成の反論に、けれど高良はぴしゃりと言い切った。それは間違いなく正論だったから、郁成は返す言葉は見付からない。

憔悴する高良は、郁成へと怒鳴った。

「治安の悪い場所に行っちまったらどうすんだい！？　早く捕まえてきな！」

その言葉に、弾かれたように郁成が走り出した。

中央通りはそれなりの治安の良さを持っているが、細道を行けば

変な連中がうろうろしている。絡まれれば何も知らない真砂はどうにもならない。
高良に言われ慌てて走りだした郁成を、高良は軽く溜め息を吐いて見送った。

どこに行こうかなんて何も考えずに走ってきたから、すっかり何処とも知れない場所にまで来てしまっていた。
日が暮れかけてきたというのに、何故か通りには人が増えるばかり。悲しくて、とても人が沢山いる場所にはいられなくて、人の少ない道を選んできてしまったが、それが仇となった。
ただでさえ見知らぬ地で、知らない人ばかりのこの場所で、真砂一人で走り回るべきでは無かった。
それでも。

（……どうしよう）

心なしか、この通りは薄暗くて仄かに不気味めいていた。
表通りのきらきらした艶やかさはなく、歩く男達の人相もどこか恐ろしく見えた。女達も先ほど見た霞や高良のような美しさはなく、薄気味悪い感じすらする。
それに、なんとなく自分が浮いているような気がする。すれ違う人達にちらちらと視線を向けられているし、きっと気のせいではな

いだろう。
元の大通りに戻ろうと早足で歩いてみても、ますます道は狭く不気味になるばかり。

（……怖、い…）

一度意識してしまうと、尚更怖くなる。すっかりくたくたで、酷く心細くて、また泣いてしまいそうだった。
黒塗りの大きな門からは出ていないから、きっと同じ町の中である筈なのに、随分と様子が違う。
自然と足が小走りになる。まわりをきょろきょろと見まわしながら元来た道を探しながら、真砂は緊張で苦しくなる呼吸を堪えて急ぐ。

（怖い）

じろじろと物珍しげな幾つもの視線を向けられた。その中には決して好奇の視線だけではないものも混ざっているのが分かって、ますます真砂は泣きたくなる。
足がずきずきと痛い。

（帰りたい…）

ふと思ったけれど、売られた自分にもう帰る場所は無い。そう気付いた瞬間さっと血の気が引き、小走りだった足も止まる。
どこに行けばいいのか分からなくなってしまった。もしあの通りに戻れたって、行き先なんか無い。どうして忘れていたんだろう、売られた、という事はそういう事なのに。
痛いのは足だけじゃない。胸がぎゅっと苦しくて痛い。涙が出そう。

途方に暮れて立ち尽くしたけれど、この辺りは一層不気味さを増す。帰る場所は差し置いても、一刻も早くここからは離れたかった。
とりあえず今来た道を戻ろうと決意し、真砂は身をひるがえす。
その瞬間にどん、と誰かにぶつかって、真砂は驚いてその人を見上げて謝る。

「っ、ごめんなさ……！」

けれどそれ以上何か言う事は出来なかった。逃げ場を奪うように背の高い男達が真砂を取り囲んで、下卑た笑みを浮かべていたから。
ぞっとして頭の中は真っ白になる。恐怖で足が竦み、何が起きたのかちっとも理解出来なくて、逃げるという事すらも考え付かない。
誰か、という都合の良い願いが浮かんだけれど、怖くて声は出なかった。

そこらへんを歩いていた知り合いに片っ端から聞いて回ったせいでやたらと時間を食ってしまったけれど、やはり真砂は治安の悪い方向へ向かってしまったらしい。
まだ来たばかりの真砂の顔を知っている人間はおらず、なんとなくの姿や顔を口頭で説明していたら結構な時間がかかった。説明が慣れてきた頃は『ちっさくて顔の良い泣き虫』と言えば大体伝わる

と分かってきてしまったけれど、今はそれどころじゃない。
やっぱり泣いてたのか、と変な納得をしながら、郁成は目撃情報の通りの道を走る。すっかり日が暮れた町のこんな場所に来るのはよっぽどの阿呆ばかりだと思っていたけれど、物を知らない子供も来るとは。
けれどよく考えれば泣きもする。まだ十三の子供だ、見知らぬ場所に連れてこられて不安でたまらない筈だから。さすがに一人で飛び出すとは思わなかったが、それなりの配慮が欠けてもいたことは否定できない。
溜め息を吐きながら一旦立ち止まり、郁成は辺りを見回した。さっきの話ではこの辺にいたのを見た、と聞いたけれど、また場所を動いたらしい。
どこまで手間をかければ気が済む子供なのかとまた歩き出そうとした郁成だったが、ふと女の噂話が耳に入った。

「…ねぇ、見た？さっきの男の子！」

男の子、という単語に、すぐに真砂の事だと気付いた郁成は、その女達の噂話に耳を傾けた。

「何が？」
「ここいらで一番柄の悪い連中に連れて行かれてたの」
「うそ、その子、大丈夫かしらね」
「どうかしら…」
「その子供！！」

慌てて郁成はその女達に声を掛けた。剣幕に驚く女達に構わず郁成は追求する。

「どっち行った！？」

郁成の問いに、女達は僅かに口にするのを躊躇ったけれど、相手が郁成と気付くとすぐにその方向を指さす。町一番の青楼殿の楼主を知らない者はいなかった。
お礼を言ってすぐに走り出し言われた角を曲がる。
さすがにこの辺りの治安は郁成の手の届かない範囲だったが、それがこんな面倒くさいことになるとは予想しなかった。
少しずつでも治安の向上に努めないと面倒だな、とそんなことを考えながら細道を走り、二つ目の角を曲がった瞬間、何かの揉め合うような喧騒と叫び声がした。

「……いやだあぁあぁぁっ！！」
「っ真砂…！」

声の聞こえた方へすぐに向かうと、腕を掴まれる真砂が見えた。揉めている相手は、最近この辺りで頻繁に問題を起こしている連中。
ざっと見ても結構な人数はいる。郁成だけではどうにもならないことを一瞬で判断し、郁成はまっすぐ真砂の元へ向かった。

「どけぇ…！！」

真砂の腕を掴む男をまっすぐに殴りつけ、郁成は真砂の手を掴んだ。囲まれて逃げ道を塞がれる前にさっさと逃げるのが一番確実。

「こい！」
「…い、くなり、さま……！」
「早く！！」

そう怒鳴れば、真砂は素直に手をひかれるまま走り出した。怪我は、とか確認している暇すらも惜しんで、郁成は真砂を連れて連中

を振り切る。
先ほど名前を呼ばれた事で、男達も郁成であると気付いたらしく、わざわざ追い掛けてはこなかった。どうしてあいつが、とどよめく声が聞こえたが、郁成は構わずにその場を走り去る。
二度と大門を潜れると思うなよ、と心の中で吐き捨て、郁成は中央の通りへ向かって真砂を連れて行った。

4

どうしてこんなに汗だくになるまで探し回ってくれたのだろう、とようやく見知った道まで手を引いてくれた郁成の後ろ姿を眺めて、真砂は不思議に思った。

けれど理由は何にせよ、手間を掛けさせた事には違いない。

とぼとぼ郁成の後ろを歩きながら、真砂は思い切ってようやく声をかけた。

「あの……」

そう言うと、郁成は振り返って真砂と目線を合わせるようにしゃがんでくれた。

「怪我は？」

先程尋ねそびれた質問をすると、真砂はふるふると首を振った。見たところ変わった所も無く、真砂の否定に安心したが、尚も郁成は尋ねる。

「連中に何かされそうになったか？」

「ううん…攫われて、どっかに売り飛ばされそうに…なった、だけ……あの」

きゅっと拳を握り締め、真砂は眉を寄せて俯いた。

「ごめんなさい……勝手な事をして…迷惑、掛けて」

何をどう、とまで上手く言えなかったが、罪悪感はあった。自分の勝手な行動のせいで、わざわざ探しにきてくれた郁成まで危険に晒して。

怒られるだろうか、と真砂が萎縮していると、郁成はぽふ、と頭を撫でてくれる。

「うちの店の人間のお前を、危険な目に遭わせないのが俺の仕事」

そういってふと郁成は笑った。

「無事で良かった。　帰るぞ」

「？　どこに…」

「どこって、あそこ」

帰る、という言葉に戸惑う真砂に、郁成はさっき真砂を案内した、町で一番大きな建物を指差した。

すっかり夜になった町にさえ明るくて綺麗で、目が釘付けになった真砂の手を引いて、郁成は言う。

「親元離れたばっかりだしな、寂しいだろ」

そう言われ、真砂は言葉に詰まった。

寂しいに決まってる。けれど、帰ったら迷惑になってしまうのも分かっている。真砂の家に払ったお金を働いて返さなくてはいけないし、新しい環境にも慣れなくてはいけない。

ぎゅっと胸が押しつぶされるような感覚がした。そんな真砂の表

情を見て、郁成はすとんとしゃがみ込む。

「親と別れる時、泣いた？」

その質問に、真砂は首を横に振る。

泣いていたのは家族だけ、真砂は妹の前で泣いたり出来なくて我慢していた。

「文句言った？」

その言葉にも首を横に振る。

どうしてそんな事を訊くのかと不思議に思っていたら、郁成がふわりと笑った。

「偉い」

突然褒められて、真砂は驚いたよりも安堵でまた涙が出そうになった。

偉い事なんてない、こっちに来てからは家族の事だって恨んだし、勝手な真似をして迷惑を掛けたのに。

そう思っても、郁成が優しく頭を撫でてくれる。

「頑張った、偉いな。　心配掛けたくなくて、我慢したのか」

きゅうっと心臓が苦しくなる。決して嫌な気持ちじゃなくて、くすぐったいような、嬉しいような、温かい気持ち。

さっきまで悲しくてたまらなかったのが嘘のよう。

「もう大丈夫、うちの店の人はみんな優しいから、安心していい」

そういって軽々抱き上げられ、真砂は慌てた。

「…わ、っ……」

「もう疲れただろ。　帰ったら休め」

そう言われれば、足に力が入らない事に気付いた。

そんなに歩くのが覚束なく見えただろうかと思いながらも、真砂は抱き上げられて深く安心し、郁成の肩に顔を押し付け、ほんの僅かに本音を洩らした。

「……おなか、すいた…」

その言葉に、郁成はくすくすと笑う。

「そっか、じゃあまず飯だな。　明日からちょっとずつ働いてもらうけど、今日は俺の家にいろ」

「郁成様の……？」

「ああ。　さすがに店は慌ただしいからな」

「……ん」

そう返事をしたはいいけれど、涙が出そうで声が詰まっていた。

それに気付いたらしく、郁成は真砂の背をあやすように軽く叩く。

（……優しい…）

人の話も聞いてくれないし、ねちねち嫌みは言ってくるし、酷い人だと思っていたのに、違った。

わざわざ町の中を走って探し出してくれたし、危ない所を助けてくれたし、何より褒めてくれたのが本当に嬉しい。

心底安堵したせいか、ぼろぼろと堰を切ったように涙が溢れてき

た。
一体今日一日でどれだけ泣いてしまったんだろう。
泣きすぎて目が痛いのに、一度零れた涙はなかなか止まらない。
真砂は強く郁成にしがみついて、声を押し殺して泣いた。郁成が宥めるように背を撫でてくれるから、尚更涙は止まらない。

（…涙が止まったら、きっとちゃんとお礼を言おう）

思えばずっと言いそびれていた。ごめんなさいは言ったけど、ありがとうは言えていない。
ぎゅっと郁成の着物を握り締め、真砂はそう心に決めた。

4（後書き）

遊郭ものですが、半分ファンタジーとして捉えて頂ければいいかと思います。

あと若衆禿ってアルバイトみたいなものらしいですが、ここでは下働き兼禿として使っています。禿は遊女見習い。

あちこちおかしい点がありそうですがファンタジーなので（ｒｙ

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1831m/

楫枕。

2010年10月10日03時43分発行